

## 尾崎〈おざき〉の枯木神社〈かれきさん〉（一宮町尾崎）

むかしむかし、一宮町の尾崎の海岸に、大きな枯れ木が流れついた。

それを見つけた村人たち、

「ごつい木やなあ、どこから流れてきたんやろ。」

「皮がむけてしもとるから、長いこと海で泳いどったんやろ。」

「何の木かなあ、こんな赤黒い色した木は見たことないのう。」

と言いながら、たきぎにしようというので引きあげにかかった。ところが、その木にさわった者たちは、たちまち体のあちこちが痛みだした。

「うわあっ、いたい、いたい。」

「こりゃこたえん、助けてくれえっ。」

みんな、海岸のごつごつした岩の上で、体のあちこちを押えて、ころげまわった。

「こりゃ、おそろしい木じゃ。たたりがあるわ。」

「きしよくの悪い（気持ちの悪い）木じゃと思っただが、こんなにむごいとは知らなんだ。」

「こんな木に、長いことおられたらこたえん。はよ、よそへ流せ。」

そこでおそろおそろ、沖の方へ突き出した。突き出された木は、潮に流されて隣村の海岸へ流れついた。



何も知らん隣の村でも同じこと。たきぎにでもしようかい、というわけで、引きあげにかかったところが、みんな体中が痛みだした。手足がしびれるわ、腰が抜けるわ、目がくらむわ。

「こないな、きしよくの悪い木、はよう、よそへ流せ。」

というわけで、又押し出されて、もとの尾崎の海岸へ流れついた。

「うわあ、またきよったわ。くわばら、くわばら。」

「いっそ、遠いところへ持っていけや。」

今度は、元気な若者たちが、舟で引っ張って、岩屋の沖まで運んで行って、そこで放り出した。放り出された枯木は、潮の流れのまにまに、浦から仮屋、佐野の沖を通して、志筑〈しずき〉の海岸へ流れついた。志筑の人々も、

「ごつい木やなあ、どこから流れてきたんやろ。」

「何の木かなあ、こんな赤黒い色した木は見たことないのう。」

そう言いながら、ひとかかえもありそうな枯木を引きあげにかかったが、さあ大変。

「うわあっ、痛い、痛い。」

「こりゃこたえん、助けてくれえっ。」

と海岸の砂の上をころげまわった。

大〈おお〉そうどうしているところへ、物知りじいさんがやってきた。

「この木はなあ、むかし静御前〈しずかごぜん〉様が、淡路へ来なさったとき、持ってきて植えなさった霊木〈れいぼく〉（魂〈たましい〉のある木）で、長いこと立っつたんじゃが、台風ででも流されたんじやろ。お前ら、大事にせんかい、ばちがあつたんじゃ。はよう、お供〈そな〉え持ってこい。」

と、みんなに言ったが、まだ手足のしびれも直らぬ連中は腹を立てて、

「静御前もへちまもあるかい。」

「こないな、きしよくの悪い木、はよう、よそへ流せ。」

というわけで、また舟で引っ張って岩屋の沖へもっていった。

尾崎村の人たちは、まさかもう来〈く〉まいと思って、それでも海岸へつき出た岩鼻の上で、見張りを出していた。ところが、あのぶきみな、赤黒い色をした枯木が、また沖にあらわれて、まるで生きもののように、ゆらりゆらりと寄ってくるのを見ると、みんなは、へなへなとその場にへたばってしまいました。

やがて、志筑の方からも、静御前の話が伝わり、村人たちはその枯木を、海岸の岩鼻の上に、明神〈みょうじん〉さんとして、ていねいにまつりました。それからの長い間、その木は枯れたまま倒れもしないで、ずっと海岸に立ちつづけていました。沖を通る船など、波の荒い日には、海上から、その枯れ木にお祈りをし、難をのがれることもたびたびでした。

現在、この木は、尾崎の枯木部落にある枯木神社のご神体として祭られています。土地の人々の話によると、白布〈はくふ〉で包んだご神体は、何百年たった今でも、つやつやとしており、その布を巻きかえるときに、手でさわった人が、後でかげんが悪くなった、などという話も聞かれます。